

研究所報

No. 4

1982. 6. 1

<題字> 学長筆

目次	大学における研究と教育 1
	昭和57年度「指定研究」
	研究計画紹介 2
	海外仏教研究 2~3
	「真宗総合研究」
	研究会報告 4
昭和57年度「一般研究」	
研究内容報告 5~6	

大学における研究と教育

大谷大学 大竹 鑑
短期大学部長

「大学とは何か」という問が自覚的に提起されたのは18世紀末のドイツの教育・思想界においてであった。そして、教会に奉仕する学問として神学を重視し、宗教的価値を至上とした中世の大学、政治価値に従属し、国家に奉仕する官吏の養成機関として法学を重んじた近代の大学に対して、大学は学問的真理追究の場である、真理価値のみを至上とし、学問研究のみに仕える高等学術機関（フンボルト）であると規定し、ヤスパースはそれを「人類の根源的な知識欲が自からを実現する場」と表現した。それは規模は小さく、静謐な空気につつまれていて、教養ある知識探求者が集まり、道徳的権威のある専門家集団の自治によって一切が決定される、と描かれた。そこでの教育は、真理追究の営みである研究によって獲得された知識・文化の伝達、訓練であった。その後、経済、社会体制が変り、政治体制を異にするに応じて大学は様々な形をとった。わが国では、産業化が進み情報化社会という新しい時代をむかえて大学は、そのシステム全体を最も有力な情報産業の生産体と考え、研究や教育の組織を意識的に産業経済の一環として捉えようと主張されたことはなお耳目に新しい。知識の価値基準は社会的有用性にあり、そこでの研究は有用な知識の獲得であり、教育は有用な人材、有用な知識の担い手の生産である。このような大学像にはさすがに気がさしたのか、修正する形で提案されたのが、マルチパーシティの構想であった。大学の規模は大きく、知的ならびに実用的知識の両方の生産をおこない、社会の種々の要請に応える。各分野に権威のある専門家を擁しているが、彼らは専門外の事については必ずしも教養ある知識人ではない。道

徳的権威を求められることはなく、大学の組織は近代的管理技術を導入することによって保たれる。そこでの研究者が教育とかかわるのは、(1)それによって平生やれないような基礎的なものまで考えが及ぶ、すそ野が広がる、(2)それによって新しい世代からの刺激を受ける、ためであるとされた。この二つの大学像はまさしく技術革新と石油エネルギーに支えられた経済の高成長期の産物である。しかし時代は確実に転換している。その一端の証左をあらゆる分野を網羅する文化講座、カルチャー・センターの盛況に見ることができる。脇目もふらずに“みんなどこかへ行く途中”と駆けていたのが、突然ゆっくり佇み歩くことを余儀なくされて、手持無沙汰のあまり趣味、教養に向かわせた、ということであろうか。おそらくそのように単純なことではない。現実の変化に直面して、今日に生きる人間のあり方を探るべく自らも意識しない力が作用してあのような形をとらせる、ということであろう。このような時代の、そして情報化社会の、教育程度が高く、言葉に対する反応が敏感である日本において、大学の研究と教育に期待せられるものは自明である。情報の取捨選択を適確に行う思考力、判断力を学生につけさせることであり、ひいては人間性への深い洞察に導くことである。大学の研究所設置は「自分自身を見究める眼を自分自身のうちに確保したこと」（「研究所報」No.1, 廣瀬学長）といわれる。自から燃焼してはじめて周囲に光と熱を与えうる。研究所はそのような研究と教育のあり方を象徴し、そのようにあることを絶えず要請するものとして存在する、とあってよいと思う。

大谷大学真宗総合研究所

昭和57年度「指定研究」研究計画紹介

研究名	研究課題及び研究組織
真宗総合研究 (特定研究代表 廣瀬 杲)	研究課題 「近代における真宗の展開」 研究員・嘱託研究員・研究補助員 前年度に引き続き、学内16分野にまたがる教授・助教授・専任講師 助手・非常勤講師等、総員31名によって組織されている。
海外仏教研究 (特定研究代表 廣瀬 杲)	研究課題 「海外における仏教研究の文献・資料に関する研究」 研究員 小野蓮明(チーフ・助教授・真宗学) 寺川俊昭(教授・真宗学) 福島光哉(教授・仏教学) 安富信哉(専任講師・真宗学) 武田武麿(主事・助教授・宗教学) 嘱託研究員 今枝由郎(フランス国立科学センター研究員) 大河内了義(ハイデルベルク国際文化交流研究所研究員・神戸大学教授) 羽田信生(前大谷大学真宗総合研究所客員研究員) ベリーニ・リノ(本学非常勤講師) 研究補助員 小谷信千代(助手・仏教学) 宮下晴輝(助手・仏教学) 藤嶽明信(特別研修員・真宗学) ロバート・ローズ(博士課程修了生・仏教学)
大蔵経学術用語研究 (委託研究代表 廣瀬 杲)	研究課題 「日本撰述華嚴宗関係典籍における学術用語の研究」 研究員 小川一乗(教授) 鍵主良敬(教授) 木村宣彰(専任講師) 坂東性純(教授) 福島光哉(教授) 古田和弘(助教授) 三桐慈海(教授) (いずれも仏教学) 研究補助員 一色順心(助手) 赤尾栄慶(博士課程修了生) 稲岡智賢(特別研究員) 織田顕祐(博士課程在学中) (いずれも仏教学)

海外仏教研究

——その目的と内容——

チーフ研究員 小野 蓮 明
(本学助教授・真宗学)

学問の国際交流は年々その隆盛を深めているが、仏教研究においてもその例外ではない。欧米文化圏、殊にアメリカにおける仏教研究は、近来著しいものがあるといわれている。アメリカへの仏教の紹介普及は鈴木大拙師の業績によるものであることは周知のことであるが、現在では、多くの大学において仏教に関する講座乃至は講義が開設され、専門的な研究者も増えつつあり、それらの人による著書(経典の翻訳も含む)の出版や研究論文の発表を数多く見ることができる。就中、

浄土教思想に関する研究においても顕著にその動向が見られるようになった。そのことは、われわれにとってはまことに喜ばしい現象である。それらの中には、注目に値する研究もあり、またその動向は、わが国における仏教研究にとっても、決して看過できないものとなってきている。

本学においては、北米のウィスコンシン大学との間に学術提携の公的な関係が結ばれ、研究者の交流がなされている。そして今後もそれ以外の大学との学術交流も実現されていくであろう。仏教

研究に関する海外の大学との学術提携は、主として、本学からある学術成果を期待して海外の大学に交流を求める場合もあろうが、むしろ海外の大学がその研究成果の実をあげるために、本学に学問上の提携を求めてくる場合が多いと思われる。仏教の世界性・普遍性が叫ばれている今日、そのような動向に対して、われわれは敏捷に仏教のもつ世界性を確認し得る方向性を見出すことが必要である。人間存在の根本的解明を目指す仏教を「学」として世界に解放せんとすることは、すでに本学の建学の根本精神であり、創学当初からの重要な使命でもあった。しかし、そのことの実現には幾多の問題があることは言うまでもない。

例えば、仏教研究の学術提携という場合、それらの研究の共同的作業が如何になされるべきか、を十分に検討されなければならないし、また、そのことよりも更に大切なことは、欧米における仏教研究がどのようになされているか、という現実的状况をできる限り正確に認識していなければならない。そうでないと、学术交流を求められても、或はまた、積極的に仏教を「学」として公開しようとする際にも、十分な実をあげることはできないからである。いずれにしても、仏教研究への本学の担うている役割と責任は重大である。しかし、それに応ずる状況はようやくその緒についたところであって、本格的な活動は、今後の研究に俟たなければならないであろう。

そこで当研究においては、以上のような視点に立って、「海外における仏教研究の文献・資料に関する研究」を研究課題として、その基礎的な試行を目論むものである。当研究の具体的な課題と作業を述べると、大きく言って次の二点である。

1. 欧米における仏教研究の現状を文献資料によって調査する。
 - イ. 文献資料の収集
 - ロ. 収集された資料の分析・分類調査、及びその解説
 2. 日本における文献資料の欧米への公開作業。
 - イ. 公開すべき文献資料の検討
 - ロ. 翻訳作業の基礎研究及び外国との共同作業の研究
 - ハ. 翻訳作業の実動
- 第一の欧米における仏教研究の現状を文献資料

によって調査することの意義は、既に述べたように、海外における仏教研究の現実的状况をまず客観的に正確に認識するという点にある。つまり、そこでは仏教の正しい把握、或は領解がなされているかどうか、また仏教思想の如何なる点に多くの関心が寄せられているか、等の問題の確認である。そして、そこで収集された文献資料を、例えば、人名、地域別、或は学問内容の別に分類し、整理し、それを評価吟味し、わが国の仏教研究に資するものがあれば、それを翻訳して紹介することも必要であろう。

第二の日本の文献資料の欧米への公開作業については、第一の欧米の現状の正確な認識に基づいて、公開すべき具体的な文献資料の検討、更には翻訳作業の際に生起するであろう具体的問題の基礎的な研究、そして翻訳作業の実動へと取り組んでいかなければならない、ということである。しかし、このような作業の具体的な段階に至っては、更に多くの専門的な研究者の大きな助力を得て、より綿密に検討されなければならないであろう。

そこで、本年度の具体的な研究計画として、第一の欧米における仏教研究のうち、特に「北米」における仏教研究、就中、浄土教研究の現状と文献資料の収集、調査から着手することにする。北米に最初の焦点を絞ったのは、学術提携を結んだウィスコンシン大学があること、また、北米には東本願寺の開教区があり、その人々を通して浄土教の現状の把握とその文献資料の収集に着手し易いと考えたからである。浄土教関係の資料を主として、しかも英語文献を中心とし、過去20年位の間に発表されたものを目安にして、いくつかの文献目録などから仏教研究者名をリストアップし、その研究文献を収集する。その作業は、言うまでもなく、細心の集中力と強い忍耐力を必要とする地味な作業である。しかし、このような研究には、まずそのような惜しむことのない努力が必要であろう。

また、そのような資料収集作業と同時に、アメリカの仏教事情に明るい研究者を招いて話を聞いたり、或は向うの学者で来日している場合など、その人を通して積極的にその事情を吸収していきたいと考えている。海外仏教の研究は、大谷大学のこれからの国際的学术交流の礎石となるものである。その基礎的な試行作業に着手するのである。

ここに与えられている課題は、佐々木月樵学長の「大谷大学樹立の精神」のもとに、本学において如何なる教学と教育の営みが繰り広げられ、それがどのような意義をもち、またどのような問題を今日に投げかけているかを考えるに際して設定されるいくつかの視点の一つであって、仏教学の近代化という観点からそれを見究めようとするものである。

いわゆる「近代」についてはさまざまに論議を要するが、いまはひとまず明治以降を指すと考えるならば、この時期に或る特徴をなして形成されきたった仏教学研究の様態を「近代仏教学」と呼ぶことができる。しかしそれは、明治という時代になされた仏教学研究を称するにとどまらない。前「近代」への反省・批判の上になった「近代精神」ともいうべきものが、仏教学研究という場において表現されたものなのである。日本のあらゆる分野で大きなうねりとなって表われた動きの一環をなすのであって、いわば、時代性が仏教学研究のあり方をそのようなものとして要求したのであり、また仏教学研究はそのような様態をとることによって時代の動きに参加したのであった。

こうして形成された仏教学は、端的に云うならば、一宗一派の専有となっていた伝統宗学の閉塞性から宗義を解き放つとともに、仏教を歴史的にも地域的にも全体像において捉え直し、そうした視野の中であらためて「人間」というレベルにおいて宗義を再確認するということであったと云えるであろう。それは、文献学的・歴史学的・哲学的などと云われるすがたをとり、さまざまな予定概念を排除した実証を重んじたのである。

「近代精神」は、一方では清沢満之による新しい教学運動としての精神主義として、他方では南条文雄に代表される文献学的研究、村上専精などの歴史学的研究、井上円了のような哲学的研究等々の仏教学研究として、その実が発揮された。「樹立の精神」とのかかわりにおいて近代仏教学を考えるには、その基盤をなした「近代精神」によるこのような学的営為を具さに検討する必要がある。それぞれの具体的な成果を通して、それが如何なる意味合いをもった「近代」への意志の発現であったかを見定めねばならないのである。佐々木月樵と清沢満之との関係についてはここでは多言を要しない。また佐々木月樵が清沢満之の信念と教学の祖述者た

らんとしたことは『精神界』に掲げられた諸論をはじめとして、うかがい知られるところである。この佐々木月樵が、例えば、南条文雄・村上専精などの学問業績を眼の当りにして何を考えたのであろうか。自らも仏教学研究に携わりつつ、自覚的な近代人として何ごとかをなそうとするとき、そこにどのような問題があったと云えるのであろうか。

＜指定研究＞

近代仏教学の形成

研究課題

「真宗総合研究」研究例会報告
昭和56年1月26日(火) 16時

本学
助教
教授員

古田

和弘
(仏教学)

清沢満之は、人間の宗教的自覚の普遍性を求めることによって、思想界の近代化を方向づけた。南条文雄は、仏教文献の客観的実証的研究を通して普遍性を求め、この分野に巨大な足跡を残した。同じく「近代」を志向する両者のこの特徴の相違は、近代学ということからすれば単に方法の相違という以上の相違となって眼に映るであろう。奇しくもこの両者が、初代・第2代の学長として、大学の行方を決定し、基礎を築いた。佐々木月樵は、清沢満之の鋭角な精神を継いでこれを「大学」を場として実現しようとした。ここに南条文雄との意識の差を見ることができる。同時に仏教学者として扱う資料の種類こそ異なるが、南条文雄に近い方法によって、これに匹敵する業績をあげた。ここに清沢満之の直線的な継承でない面を示している。その佐々木月樵が第3代学長として、大学令による大谷大学を構想するに当っては、果して何を志向したのか。「樹立の精神」に仏教学研究への如何なる志願を託したのであろうか。そこには「精神」の重厚なはたらきを見て取ることができるであろう。

この「精神」はどのような質で、どのような仕方であって後継がされたのか。困難なことではあるが、これを冷静に立体的に見届けねばならない。「樹立の精神」

の旗印のもとに、宗門の内外から幾多の逸材が大学に参集した。また、いわゆる「近代仏教学」の成果と呼ぶにふさわしい業績が多く残されてきたのである。

しかし、さまざまな局面で「近代」の批判的克服が迫られている今日、戦後ほど遠からぬどこかに「近代仏教学」なるものの一線を画して、今や風化して伝わる「近代仏教学」の意味を整理して見なければならぬであろう。また「樹立の精神」というならば、その今日的表現としての仏教学研究のあり方の実質を明確にしなければならぬであろう。

＜一般研究＞

昭和57年度「一般研究」研究内容報告（その二）

＜個人研究＞

中国征服王朝期における信仰形態

研究員 藤 島 建 樹
 本学教授 (東洋史学)

大唐帝国が崩壊した10世紀の東アジアは大転換期を迎えた。北では唐の羈縻から放たれた外民族が民族的自覚を強め、個有の文化に自信と誇りをもって独立の姿勢を見せはじめた。916年契丹国(遼)の建国。この遼が長城以南の地「燕雲十六州」を領有したのが936年。征服王朝を「本来中国の領土を北方の自らの根拠地とあわせ支配した民族国家」とするならば、この時期が征服王朝の発端となる。この遼を滅ぼした女真族の金はさらに南下し黄河を渡って淮水の線にまで支配をひろめた。13世紀に入って激しい動きを見せたモンゴル族は、フビライ汗にいたって元を建国、長江をこえて南宋を屠り外民族としては始めての中国全土支配を完成し、征服王朝の絶頂期を迎える。そして1362年、このモンゴル族が朱元璋に追われて北方に去って征服王朝はひとまずその幕をとじる。このほぼ450年間、彼らのその支配方式には、北方遊牧民と南の農耕民を分けて治める二重統治体制や、自分たちの文字を作ることなどの例に見る如く種々の工夫をこらした。そこには漢化を防ぎ、民族の保持・団結と国家の永続を願う智恵と努力の表現が見られる。

一方、南の漢民族も五代の混乱を收拾して成立した宋のもとで新体制の確立につとめた。宋以後を中世とするか近世とみるかの論争ははげしいが、いつれにしても大きな転換点とすることに異議はない。君主権を強化した集権的官僚体制も、結果はともかく新法・旧法に根ざした激しい党争も、また朱子に代表される思想の強化もいつれも漢民族国家の再建と侵入者に対する抵抗への模索と見ることもできよう。

このように征服王朝の時代は南と北・漢民族と外民族との間に生存をかけた熾烈な抗争と巧みな融合が交錯し新しい歴史が創造された時期であった。したがってこの時期に関する研究は、個々の事象に対してはかなりの賑わいを見、その成果もすくなくはない。しかし、南・北相方が如何に行動し、如何に影響しあい、如何に変革したのかが充分に明らかになっているとはいいいない。征服王朝史に立つものは北方民族の特性を強調するのに熱心で宋代史を見ず、宋代研究者は征服王朝を低文化の侵

入者として軽視する。こうした研究者の姿勢に起因して、ことに金・元支配下の中国社会には不明な点が多々残されている。

本研究は宗教活動・信仰形態の面から金・元治下の中国社会の実状を究明することを目的とするものである。この時期、仏教界では禅僧の活躍、禪淨併修の傾向、白蓮・白雲宗の浸透と弾圧、元宗室のラマ教尊崇など。また道教では華北における革新派全真教の伸張と江南での旧道教のまきかえし、そして道仏両者の論争と、宗教界はまことに多彩である。それらの基本的事象は先学の研究によってかなり明確に示されている。なかでも本学名誉教授野上俊静博士の『遼金の仏教』『元史釈老伝の研究』そして最近著『中国浄土教史論』中の関係論文など一連のすぐれた業績は征服王朝仏教史研究の大きな基盤となっている。それを継承する意味でも本研究が本学においてなされなければならない課題といえようが、この先達に導かれ、近年陸續として出版される石刻史料、地志、寺観志そして文集類を検索するならばより精緻な宗派の実態、より細密な地域の実状が明らかになり、それらを総合することによって時代と社会の様相を論証し得ると考えられる。

さいわいにも、最近『中国仏教社会史研究』を上梓し、宋代研究から征服王朝史への連結を試みようとする笠沙雅章氏(京都大教授)と、禅宗史に加えて征服王朝史に堪能な西尾賢隆氏(花園大助教授)の嘱託研究員への就任をえ、定期的研究会を継続し得る体制が整った。やらねばならない作業は山積しているが、当面は元代の石刻関係史料の解説・分析に重点をおき時代的・地域的状況の把握につとめてゆく。

＜共同研究＞

大谷大学所蔵西藏蔵外文献の歴史的・思想的位置づけに関する研究

研究代表者 小 川 一 乗
 本学教授 (仏教学)

本研究は、大谷大学図書館に蔵せられている四千百点余りにのぼる西藏蔵外文献の内容を調査分類することを当面の目的としているが、その将来においては、歴史研究にとっても思想研究にとっても貴重な資料であるにも拘わらず、未だ研究が着手されぬまま収蔵されている諸文献を、文献研究や翻訳研究を通して、広く内外の学界

に供せんとするものである。

本学所蔵の西藏蔵外文献の大半は、今は亡き寺本婉雅教授がその若き日に伏藏開頭の志に燃えて、彼の国から将来されたものである。その他には、同時代に三度入蔵を志しつつ、その地の官迎に妨げられて挫折し、ついには消息を絶ってしまった、島根県出身の大谷派の青年僧能海寛が寺本教授に托して将来したものも少部ながら所蔵されている。また、近年では、インド・ネパールに留学した人々によって持ち帰られたもの、最近インドにおいて再刊されたもの、などもかなりの部数が所蔵されている。

文献整理の作業は、学園紛争のさなかの昭和43年に始められ、当時東洋文庫に研究員として勤務されていたソナム・ギャツオ、ケツン・サンポ、トウプテン・ダタクら諸師の協力をも得て、昭和48年には『西藏文献目録』を刊行する運びとなった。(同種の目録としては、『西藏撰述仏典目録・蔵外東北目録』、『東京大学所蔵チベット文献目録』が既に出版されている。)

文献整理と平行して、内容調査の作業も進められた。先ず、文献の表題の和訳からその作業は始められ、昭和55年に文部省の科学研究費の補助を受けて『チベット文献蔵外資料の研究』と題して刊行された。その後も内容調査の作業は、西藏人学僧ツルティム・ケサン師を中心とするスタッフの手によってなされてきた。その結果、西藏仏教の輪郭がおぼろげながら把握できるようになってきた。内容調査の作業の成果を、文献の内容項目別による分類という形にまでまとめることが、ようやく可能になってきたのである。

驚くべきことに、西藏蔵外文献をその内容項目別に分類するという極めて基本的な作業すら、この研究分野にあってはパイオニア的役割を果たしたフランスにおいて

も、或は、近年多くの西藏人亡命者を受け入れ、豊かな経済力にものをいわせて大量の西藏文献出版を支援してきたアメリカにおいても、そして当の西藏人亡命者がインドで運営している西藏国立図書館においてさえ、未だ具体的な成果を生むに至っていないというのが現状である。そういう状況の中で四千点を越す未知の文献類の一つ一つを調査して、その概略をカードに記し、それに和訳をつけつつ分類法を考えるという作業が数年にわたって続けられてきたのである。その結果、全ての文献を一応その中に類別整理し得る分類表を完成する目安がようやく立つに至ったのである。今回の共同研究ではこれを完成させることを第一の目的としている。

また、既刊の『西藏文献目録』には、表題名及び著者名の索引が附せられておらず、使用に不便である。この不備を補うためにそれらの索引を作成することも平行して試みられている。蔵外文献の表題は非常に長いものであり、日常の使用には極めて不都合であるために、西藏人学者たちは略称を考案して通常それを用いている。そのために正式の表題よりも略称の方が一般的に使用され、他の文献中に引用されるときにも、その略称が用いられる場合がほとんどである。この点を考慮して、表題の略称名索引も作成中である。

以上のような作業によって、当共同研究は今年度内に次の四点の索引原稿を完成することを計画している。

1. 内容項目別分類索引
2. 表題名索引
3. 略表題名索引
4. 著者名索引

このような西藏日本両国の研究者の共同研究によって将来は本学所蔵の西藏蔵外文献資料全体の内容を解明し、斯界の発展に貢献することを最終の目的としている。

研究所行事

公開講演会

去る4月6日(火)午後1時より、研究所会議室にて、マービン・スピーゲルマン氏(J. MARVIN SPIEGELMAN, U.C.L.A. 講師、南カリフォルニア大学講師、ロスアンゼルス C.G. ユング研究所研究員)を招いて開催した。講題は「宗教心について」であった。尚、通訳はアメリカより同道された目幸黙僣氏(カリフォルニア州立大学教授)にお願いした。

海外仏教研究 研究会

5月研究例会が次のように行われた。

5月20日(木) 研究所小会議室にて

「ウィスコンシン大学における仏教研究の事情」

報告者 研究員 福島光哉教授

編集後記

57年度の初号、第4号を発行することができた。この4月から一般研究の各共同研究・個人研究もそれぞれ研究活動を開始し、研究所はにぎやかになってきた。指定研究も「真総研」および「大蔵経研」は、年次計画のまとめの年であり、充実した研究がなされつつある。それに今号に紹介されている「海仏研」も加わり、すでに資料収集が本格的に始まっている。これらの動向を今後もこの所報で次々に紹介していくことになろう。(武田)

研究所報 第4号

1982年6月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

603 京都市北区小山上総町